

筋を読まない読み方 御手洗靖大

「歌壇」四月号特集は「連作の組み立て方」。その中でも栗木京子「作中主体の厚み 匿名の場合」に注目した。

栗木によると、総合誌や結社誌などの賞の選考は匿名の連作であり、「どうしても作中主体の輪郭というものに思いが及ぶ」という。そこで、「二連を組み立てるには、まず作中主体のイメージを自分の中で明確にしておくことが大切だと思う」と提言する。連作にはそれを貫く筋のような存在が必要だということだろう。

近代文学研究者として名高い前田愛の最後の著作に『文学テクスト入門』筑摩書房一九八八年）がある。栗木の論で、第一章「読書のユートピア」を思い出した。夏目漱石「草枕」から、本の開いた所を眺めるといふ小説の読み方をすすめる主人公とそれを理解しないヒロインを取り上げ、筋を読まない小説の読み方を漱石は提示していたのだと論じる。そして、筋を志向しない漱石の背景と、筋を志向する一般読者の心性へと至るといふものである。

小説の始めから終わりまでの筋を読まねば気が済まない読み方の背景に「プロットないしはストーリーイへの興味と関心」があるとした上で、次のように述べる。

ある虚構テクストに最初に接したとき、私たちはまだ未知の部分として残されているテクストの前方にある余白から、すでに与えられている謎の解答がもたらされることを期待する。その期

待の地平は読書過程の進行に沿って刻々と変化するだろうし、筋の運びには直接関係しない描写や会話の部分も、プロットないしはストーリーを基線として、その布置が編成しなおされる。即ち、話が分かって来ることの快感や、さまざまな記述が後の展開と関連しうるといふ期待の上に、筋へのこだわりがあるとする。

分らないテクストが筋によつて明らかになったり、予想外の筋に驚かされたりする快楽が確かにある。一方で漱石はそれとは真逆の、筋を読まないという読み方を模索したのであった。小説では無理のある行為のように思われるが、短歌や俳句の連作という形態であればこれは可能である。

テクストをその筋に従わずに読むことは困難である。一首、一句の集積を読むとき、明確な場面やその展開、時間的な流れから物語が見えないとき、我々は作者（または作者の見せたい世界に生きる作中主体）を思わずにはいられない。しかし、読みの場に作者の登場を拒むテクストが出現したとき、どうするだろうか。

安里琉太『式日』（左右社）がそれである。当該句集は二〇二一年史上最年少で俳人協会新人賞を受賞した。これはまえがきもあとがきも無い異色の句集として評されてきた。作者紹介文も「一九九四年、沖繩生まれ。二〇一〇年より句作開始。銀化・群青同人」とシンプルである。作品も「沖繩の俳人」であることから読み解ける句はない、とらえどころの無い句集であった。しかし、テクストが見せてくれるはずの筋をぐっとこらえて句と向き合ってみると、立ち上がる句がいくつもある。

賞の連作はともかく、歌集・句集においては筋を読まない漱石の言う読み方もあつていいのかもしれない。